

チベット語文法学略史

班青 東周

1 序論

チベット語文法学は、チベットの言語と文字の分析を目的とし、チベット文化の特色の解明にも繋がる学問である。

現存する最古の文法書を作成したのはトンミ・サンボータ (Thon mi sam bho ta: 7 世紀) である。トンミはチベット文字を制定し、『三十頌』(Sum cu pa) や『性入法』(Rtags 'jug) をはじめとする、八部のチベット語文法書を著作したと伝承される。しかし、八部作の文法書の内、現存するのは『三十頌』と『性入法』のみである。その二つの文法書は後代の学者による多くの註釈書と共に伝承されている。

『三十頌』と『性入法』に対する註釈書は、トンミの時代から 11 世紀までの間は見られなかったが、ウパ・ロセル (Dbus pa blo gsal: 12 世紀) をはじめとする 12 世紀以降の学者達によって註釈書が著作されるようになった。それらの註釈書の内、現代に至るまでチベットで良く知られ、広く学ばれているのは、タティ・リンチェン・トンドゥブ (Pra ti rin chen don grub: 17 世紀末-18 世紀初) による『タティ三十頌・性入法註釈』(Pra ti'i sum rtags) と、18 世紀のシトゥ・パンチェン (Si tu pañ chen: 1699/1700-1774)¹ が著作した『シトゥ大註』(Si tu'i 'grel chen) である。特に後者はチベット文法学の一つの流れを形成した点で重要であるが、サンスクリット文法学の知識を多く含むため、正確に読解し、正当に評価するのが難しい作品である。

チベット語文法学の歴史に関する重要な研究として稲葉 1986 と Graf 2019 の二つがある。稲葉 1986 はチベット語文法学の歴史を初期、中期、後期の三つに分け、代表的ないくつかの文法書のみを紹介している。Graf 2019 はシトゥの文法学に関する研究であり、インドのサンスクリット文法学の影響を説明すると共に、しばしばシトゥ以前のチベット語文法書に言及している。しかし、この二者はトンミの『三十頌』と『性入法』が 12 世紀から 20 世紀に至るまで、註釈者達によってどのように伝承されてきたか、また、タティやシトゥなどの註釈達の間でいかなる議論が展開されたかについて体系的な説明を与えていない。

本稿では、上記の二つの研究を踏まえ、チベット語文法学の歴史を三つの時期に区分することによって、トンミの時代から 20 世紀までのチベット語文法学の伝承あるいはその発展の歴史を記述し、その中での『シトゥ大註』の位置づけを明らかにすることにする。

2 トンミ・サンボータによるチベット文字の制定と文法書の作成

トンミ・サンボータによるチベット文字の制定について、シトゥ・パンチェンは次のように述べている。

賢者として良く知られる彼の多くの側近の中でも名前を構成する音素が非常に美しいトゥミ・サンボータ (Thu mi sam bho ta)² が、法王菩薩 (ソンツェン・ガンポ) の命令と自分の無上菩

¹ 生年については二つの説がある。『チベット学者名辞典』によれば 1699 年であり、『トンカル大辞典』によれば 1700 年である。

² トンミ (Thon mi) の名はしばしばトゥミ (Thu mi) とともに表記される。シトゥは一貫して「トゥミ」という呼称を用いる。

提を目指した特別な誓願の力によって聖者の国（インド）にたどり着いた。そして、パンディタ・ラリクセンゲ（Lha rig seng ge）と婆羅門リビカラ（Li bi ka ra）³などに親近して数多くの内外の学問を習得し、多くの論書によって首を飾って戻って来た。その時、クンカルマル〔宮殿〕（sku mkhar ma ru）においてナーガリー（Nāgarī）文字を手本にしてチベット文字の形を作った。そして、最初に王に捧げる文字作品（yig phud）として、技巧的な様式で表した賛詞によって王を讃えたので王は喜んだ。順次にこの論書（『三十頌』『性入法』）をはじめとするチベット語の言語協約の正しい使用についての八つの論書などを作ったので、闇の中で灯火を掲げた時のようにシャーキャ（釈迦）の教えが〔インドの〕北方（チベット）に伝わる道の始まりを照らされた⁴。

トンミは王の命令によってインドに留学し、インドの大学者達の下、様々な学問を習得した。シトゥによれば、トンミはチベットに帰国後、インドのナーガリー文字を手本にしてチベット語の文字を制定し、『三十頌』や『性入法』などの八つのチベット語文法書を著作した⁵。しかし、八つの文法書の中で現存するのは『三十頌』と『性入法』のみであり、他の六作品は全て散逸している⁶。

トンミが作ったと言われるソンツェン・ガンボ王を賛嘆する技巧的な詩は、サキャ派の学僧ソナム・ギェルツェン（Bsod nams rgyal mtshan: 1142–1182）の『チベット仏教王伝』（*Rgyal rabs gsal ba'i me long*）において次のように現れる。

zhal ras gsal la ngang mdangs gang ba bzang ||
gdams ngag zab la ma chad tha dad rang ||
las ngan bag chags thams cad bsal mdzad pa ||
'phags pa ma pham yang dag dam pa la || [1]

bde gshegs bden nges ye shes te ||
ting 'dzin zhi nyid rig cing gzigs ||
nyon mongs tshogs bcom mgon po mchog ||
dug gsum bdud 'dul kun tu thul || [2]

spyang ras gzigs dbang thugs kyi sras ||
srong btsan sgam por mtshan gsol ba ||
chos rgyal khyed la phyag 'tshal lo || [3] (GRSM 72.18ff.)

今枝（監訳）[2015: 128f.]: お顔立は輝くばかりに神々しく、お言葉は深淵で途切れることなく首尾一貫し、悪いカルマをすべて断ち切ったお方、神聖で穢れなき不敗の聖者、ブツダにして、真理を知り知恵を持つお方、瞑想によって寂静の境地を知り、諸々の煩惱を滅した至

³サンスクリットの lipikāra 「文字を作る人」に相当する。

⁴SG 13.17ff.: mdun na 'don mkhas par grags pa mang po'i dbus su ming gi yi ge rab tu brjid pa thu mi sam bho tas | chos kyi rgyal po byang chub sems dpa'i bka' dang rang nyid byang chub mchog gi smon lam khyad par can gyi mthus 'phags pa'i yul du brtol te | pañḍi ta lha rig seng ge dang | bram ze li bi ka ra sogs bsten nas phyi nang gi rig pa mang por sbyangs shing bstan bcos mang pos mgul ba brgyan nas slar ldog pa'i tshe | sku mkhar ma rur nā ga ra'i yi ger dpe byas te bod yig gi gzugs brtsams te yig phud du | rgyal por bya dka'i lam las drangs pa'i bstod pas ched du brjod pas dges shing | rim par bstan bcos 'di la sogs pa bod kyi brda yang dag par sbyar ba'i bstan bcos brgyad la sogs pa mdzad pas smag la sgron me bteg pa bzhin du shākya'i bstan pa byang phyogs su rgyas pa'i lam gyi thog ma snang bar gyur to ||

⁵パリ・サンギエ（Dpa' ris sangs rgyas: 1931–）によれば、以下の八作品である（DYGP 40.2ff.）。[1] *Yi ge'i nram 'gyur gyi bzo stangs*, [2] *Ka mad sum cur bsgyur ba*, [3] *Sdeb sbyor sgrig pa'i gzhi ma*, [4] *Thon mi'i mdo rdzi'i sgra mdo*, [5] *Sngags kyi bklags thabs mun pa sel ba'i sgron me*, [6] *Sum cu pa*, [7] *Rtags 'jug*, [8] *Klu dbang mgul rgyan*.

⁶稲葉 [1986: 3]: 「トンミはインドから帰国してまた8部の文法書をも著作したと傳へられる。とにかく現存するものとしては次の2部があって、ともにチベット大蔵経論部に収められている」

上の守護者、三毒という魔物を完全に律した観音菩薩、ソンツェン・ガンポという名の護法王よ、あなたに礼拝いたします。

第一詩節ではソンツェン・ガンポ王の身・口・意の三つの美質を賛嘆している。次に、第二詩節ソンツェン・ガンポ王の智慧の円満と断の円満を賛嘆している。第三詩節ではソンツェン・ガンポ王を観音菩薩の精神的継承者（*thugs kyi sras*）であると賛嘆しながら敬礼を払っている。韻文の形式に注目すると、第一詩節は全て a 音で構成されており、第二詩節の第一詩脚は全て e 音、第二詩脚は全て i 音、第三詩脚は全て o 音、第四詩脚は全て u 音で構成されていることが分かる。この技法はダンディン（*Daṇḍin*: 7–8 世紀）の『詩鏡』（*Kaāvyaḍarśa*）3.83 に規定される母音（*svara*）の限定（*niyama*）に一致し、制作が難しい詩（*duṣkara*）の代表例として挙げられるものである⁷。この技法は、チベットの伝統では *dbyangs nges pa* 「母音の限定」として知られ、後代のチベットで書かれた美文詩にも広く登場する。

さて、シトゥによれば、トンミはインドのナーガリー文字を手本にしてチベット文字を制定したとのことであるが、トンミが手本にしたインド文字が何であったかという問題については、チベットの学者達の間で意見の相違が見られる。プトゥン・リンチェン・ドゥブ（*Bu ston rin chen grub*: 1290–1364）は『プトン仏教史』（*Bu ston chos 'byung*）において、チベット文字はカシュミール（*Kha che*）の文字を手本にして作られたと述べているが⁸、ダライ・ラマ五世ガワン・ロサン・ギャンツォ（*Ngag dbang blo bzang rgya mtsho*: 1617–1682）は『史書・カッコウの鳴き声の調べ』（*Deb ther dpyid kyi rgyal mo'i glu dbyangs*）において、トンミはランジャンナー（*Rañjanā*）文字とヴァルトゥラ（*Vartula*）文字を手本にしたと述べている⁹。一方、パウオ・ツクラ・テンワ（*Dpa' bo gtsug lag phreng ba*: 1504–1566）は『仏教史・賢者饗宴』（*Chos 'byung mkhas pa'i dga' ston*）において、チベット文字はナーガリー（*Nāgarī*）文字などの複数の文字を手本にして作られたと述べている¹⁰。さらに、20 世紀に活躍した学者ゲンドゥン・チュンベル（*Dge 'dun chos 'phel*: 1903–1951）はインドで現地調査を行なってから著した『世界知識行』（*Gtam rgyud gser thang*）において、彼以前の全ての学者の見解を否定し、チベット文字はグプタ（*Gupta*）系文字を模倣して作られたと主張する¹¹。このようにチベット文字の起源について諸説あるが、少なくともチベットの伝統的な見解では、トンミがチベット文字の制定者であるという考えが広く受け入れられている。

3 チベット語文法学の伝承

2014 年に四川民族出版社によって出版された『チベット語文法集成』（*Bod kyi brda sprod phyogs bsgrigs*）に、現存する全ての古典期のチベット語文法書が収録されている。以下ではその中から重要な作品を提示し、説明を与えながら、チベット語文法学の成立と展開を記述することにしたい。便宜的に [1] 7 世紀–11 世紀、[2] 12 世紀–18 世紀、[3] 19 世紀–20 世紀の三つに時代を区分する。

⁷KĀ 3.83: yaḥ svarasthānavarṇānām niyamō duṣkareṣv asau | iṣṭaś catuḥbhrty eṣa darśyate sukaṛaḥ paraḥ || ; *dbyangs dang gnas dang yi ge rnam* || *nge pa gang 'di bya dka' la* || *bzhi la sogs pa rab bstan 'di* || *gzhan ni bya sla dag tu 'dod* || （「母音（*svara*）、調音位置（*sthāna*）、子音（*varṇa*）に関する四種など（*catuḥprabhrty*）の限定（*niyama*）が、制作が難しい〔詩〕（技巧詩）の中で好まれている。これが以下に例示される。その他は容易である。」）

⁸BSGP 182.11ff. を参照。

⁹DTPY 21.4ff. を参照。

¹⁰CBKG 98.3ff. を参照。

¹¹GRST 257.11ff. を参照。

3.1 7世紀–11世紀

7世紀–11世紀に作成されたチベット語文法書で代表なものは、チベット語文法学の祖型を作ったトンミ・サンポータが著作した『三十頌』及び『性入法』と、チェ・キ・ドゥク（Lce khyi 'brug / Ce khyi 'brug / Ci khyi 'brug）¹²が著作または翻訳した『大八処根本』（*Gnas brgyad chen po'i rtsa ba*）と、スムリティジュニャーナキールティ（Smṛtījñānakīrti: 11世紀初）が著作した『言葉の門』（*Smra sgo mtshon cha*）の四つである。

3.1.1 『三十頌』

題目： *Lung du ston pa rtsa ba sum cu pa. Vyākaraṇamūlatrimśaka. Tohoku no. 4348.*

奥書： byā ka ra ṅa'i rtsa ba'i sho lo ka sum cu pa zhes bya ba slob dpon a nus mdzad pa rdzogs so || byā ka ra ṅa rtsa ba brgyad pa las | kun tu bzang po'i byā ka ra ṅa dang po'i skabs te lnga pa'o ||
 （「軌範師アヌが著したヴィアーカラナ本頌『三十頌』が完成した。八つのヴィアーカラナ本頌の内、〔以上は〕クントウサンポ〔トンミ〕によるヴィアーカラナ初段の第五である。」）

奥書に示されている作者名はトンミ（Thon mi）ではなく、アヌ（A nu）である。プトンによれば、アヌ（A nu）という名称はトンミの父の名前に由来する¹³。ただし、20世紀の学者ツェテン・シャプドゥン（Tshe tan zhabs drung: 1910–1985）の『トンミの口伝』（*Thon mi'i zhal lung*）に言及されるある学者の見解によれば、a nu はサンスクリットの *aṅu* に由来し、「小柄な人」の意味であるとも言われる¹⁴。

興味深いことに、トンミ・サンポータ（Thon mi sam bho ṭa）という名称は『三十頌』の奥書には現れない。現時点では初出箇所を確定することはできないが、少なくとも『プトゥン仏教史』にはその名称を見出すことができる¹⁵。「トンミ」という名の由来は不明である。サキヤ派のソナム・ギェルツェン（Bsod nams rgyal mtshan: 1312–1375）が著した『王統明鏡史』（*Rgyal rabs gsal ba'i me long*）には「トゥミ」（Thu mi）という名称が現れ、シトゥの註釈でも常に「トゥミ」という名称が使われる¹⁶。サンポータ（sam bho ṭa）というのには「チベット」を意味するサンスクリット *sambhoṭa* に由来すると思われるが、ツェテン・シャプドゥンは中央チベットのロカ地方のニヤル（Gnyal）地域にある「小高い丘」*sa 'bur po* が転訛した語形サボル（*sa 'bor*）に由来するという独自の解釈を示している¹⁷。

『三十頌』と『性入法』がトンミの真作であるかどうかという点については諸説ある。ツルティム・ケサン（Tshul khriṃs skal bzang: 1942–）は、8世紀にティソン・デツェン王（742–797/798）によって建立されたショル石碑（*zhol rdo ring*）や敦煌文献に現れるチベット語表記が『三十頌』の文法規則を守っていないことを理由にして、『三十頌』はソンツェン・ガンポ王が統治していた7世紀の著作ではあり得ず、少なくとも8世紀以降に著作されたものであると主張している¹⁸。また、チャペル・ツェテン・プンツォク（Chab spel tshe brtan phun tshogs: 1922–2013）は、ショ

¹²稲葉 [1986: 24]: 「チェ・キ・ドゥクなる人名は、北京版に lce khyi 'brug 或いは ce khyi 'brug とあり、デルゲ版の東北目録には ci khyi 'brug とあって何れが正しいかわからない」

¹³BT 182.9ff. を参照。

¹⁴TMZL 3b4 を参照。

¹⁵BT 182.9ff. を参照。

¹⁶GRSM 66.7ff. を参照。

¹⁷TMZL 3b6 を参照。

¹⁸PhML 149.6ff. を参照。

ル石碑などに記録されているチベット語の表記が『三十頌』の規定とは一致しない幾つかの例を挙げた後、サキャ・パンディタの著作集に含まれる『*yi ge*の結合法』(*Yi ge'i sbyor ba*)が『三十頌』および『性入法』とほぼ一致する内容となっていることを根拠にして、『三十頌』および『性入法』の真の作者はサキャ・パンディタであり、その実体は『*yi ge*の結合法』に等しく、後にショントン・ロツァーフ (*Shon ston lo tsā ba*: 13世紀)らによってトンミの作とみなされるようになったのであるという見解を示している¹⁹。さらに、Miller 1976、山口 1983などもまた、断定を避けつつも、トンミが『三十頌』および『性入法』の作者であるという伝統説に疑問を示している²⁰。しかし、その一方で注目されるのは、12世紀の学者シャル・カトク・タムパ・デワル・シェクパ (*Shar ka thog dam pa bde bar gshegs pa*: 1122–1192)の弟子ディンポパ (*Lding po pa*)によって著作された『シャル・カトク・タムパ・デワル・シェクパ略伝』(*Dam pa bde gshegs kyi rnam thar bsdu pa*)には、「トンミの『三十頌』および『性入法』」(*thon mi'i sum cu pa dang rtags 'jug*)²¹というかたちで著者名とその著作名が現れるという事実である。このことから判断すれば、少なくとも12世紀にはこれらがトンミの作品であるという考えが確立していたことになる。このように『三十頌』および『性入法』の著者問題に関しては諸説あり、未だ定説は確立されていない状況にある。

さて、奥書によれば、『三十頌』は八つのヴィアーカラナ本頌 (*byā ka ra ṅa rtsa ba brgyad pa*)の内、ヴィアーカラナ初段の第五 (*byā ka ra ṅa dang po'i skabs te lnga pa*)に属するという。この記述をめぐって様々な解釈がなされてきた。以下ではツェテン・シャプドゥンの『トンミの口伝』²²に従って、『三十頌』註釈者達の議論の概要をまとめる。

第一に、ナムリン・パンチェン (*Rnam gling paṅ chen*: 18世紀)の『三十頌』註釈『光り輝く寶石』(*Snang byed nor bu*)に以下のような解釈が示される。

NSNB 46b1: *bstan pa'i sgron mer byā ka ra ṅa rtsa ba brgyad pa las | kun tu bzang po'i byā ka ra ṅa dang po'i skabs te lnga pa'o zhes gsungs pa ltar na 'di nyid bstan bcos brgyad gyi lnga ba yin par mngon no ||*

『仏説灯明論』(*Bstan pa'i sgron me*)²³に示される「八つのヴィアーカラナ本頌の内、〔以上は〕クントゥサンポ〔トンミ〕によるヴィアーカラナ初段の第五である」という言葉によれば、まさにこれ(『三十頌』)は八つの論書の中の第五番目であると理解される。

このように、ナムリン・パンチェンによれば、『三十頌』はトンミが著した八つの文法書の中の第五番目の書物である。これに対し、タティ・リンチェン・トンドゥブ (*Pra ti rin chen don grub*: 17世紀末–18世紀初)は自身の註釈『タティ三十頌・性入法註釈』(*Pra ti'i sum rtags*)において、ナムリン・パンチェンの見解を批判し、次のように述べる。

PTST 72.6ff.: *'grel pa bstan pa'i sgron mer | byā ka ra ṅa'i rtsa ba brgyad pa las kun tu bzang po'i byā ka ra ṅa dang po'i skabs te lnga pa'o || zhes gsungs pa ltar na | thu mis mdzad pa'i brda' sprod pa'i bstan bcos kyi rtsa ba chen po brgyad yod pa'i nang nas | rtsa ba dang po'i nang gi skabs sam le'u lnga pa ni bstan bcos 'di yin par bzhed 'dug pa la | rnam gling pas | 'grel ba 'di ltar na 'di nyid bstan bcos brgyad kyi lnga pa yin par mngon | zhes ma brtags pa kho nar gsung ngo ||*

¹⁹Chab spel 2006: 3ff. を参照。

²⁰Miller 1976: 1ff. および山口 1983: 456.10ff. を参照。

²¹DSNT 4b5 を参照。ナガ・サンギェ・テンタル (*Na ga sangs rgyas bstan dar*: 1961–)の *Bod kyi brda sprod nag tik* 53.9ff. に指摘されている。

²²TMZL 13a2 を参照。

²³著者は14世紀に活躍した有名な翻訳官ナムカ・サンポ (*Nam mkha' bzang po*: 14世紀)である。『仏説灯明論』には『三十頌』の奥書が引用されるのみである。

〔『三十頌』〕註釈書『仏説灯明論』に示される「八つのヴィアーカラナ本頌の内、〔以上は〕クントゥサンポ〔トンミ〕によるヴィアーカラナ初段の第五である」という言葉によれば、トゥミ（＝トンミ）が著作した八つの大きな根本文法書がある内、第一の根本〔文法〕書の中の第五段もしくは第五章（skabs sam le'u lnga pa）がこの論書（『三十頌』）であると〔ナムカ・サンポ翻訳官は〕お認めになっている。それにも関わらず、ナムリンパは「この註釈（『仏説灯明論』）によれば、まさにこれは八つの論書の中の第五番目であると理解される」と無思慮な〔見解〕のみを述べている。

タティによれば、『三十頌』はトンミが著した八つの文法書の内、第一の書物の中の第五章である。以上のように「初段の第五」（byā ka ra ṅa dang po'i skabs te lnga pa）という言葉をめぐる二つの解釈がある²⁴。

『シトゥ大註』に与えられる科文（sa bcad）に基づいて『三十頌』の内容を以下に示す。『三十頌』は主に格と助詞の使用法を定める論書である。

第1-6偈：チベット文字を āli（a 系列音）を表す文字と、kāli（ka 系列音）を表す文字とに区分する。kāli を表す三十の文字を七群半に区分した後、それらを後置字になり得る文字、添置字になり得る文字、基本文字の前後に置かれることのない不添字の三種に区分する。

第7-17偈：後置字に依存してその適用・不適用が決定される助詞および格助詞について述べる。

第18-23偈：後置字に依存しない助詞について述べる。

第24-29偈：後置字の必要性などを述べて結論する。

3.1.2 『性入法』

題目：Lung du ston pa rtags kyi 'jug pa. Vyākaraṇalingāvatāraṇa. Tohoku no. 4349.

奥書：lung du ston pa rtags kyi 'jug pa shes bya ba zhes bya ba slob dpon a nus mdzad pa rdzogs so || byā ka ra ṅa rtsa ba brgyad pa las | kun tu bzang po'i byā ka ra ṅa gnyis pa'i skabs te drug pa'o ||（「軌範師アヌが著した『ヴィアーカラナ性入法』が完成した。八つのヴィアーカラナ本頌の内、〔以上は〕クントゥサンポ〔トンミ〕によるヴィアーカラナ本頌の第二段の第六章である。」）

セルトク・ラマ（Gser tog bla ma: 1845-1915）は自身の『三十頌』と『性入法』の註釈（Gser tog sum rtags）において、『性入法』はトンミによる八つの文法書の中の第六番目であると述べ、奥書に見られる kun tu bzang po'i byā ka ra ṅa というのは（「クントゥサンポ〔トンミ〕の文典」という意味ではなく、nam pa kun tu tshig don bzang po'i byā ka ra ṅa（「完全に正しい言葉とその意味に関する文典」という意味であると理解している²⁵）。

『性入法』はチベット語動詞の時制の表示に関わる文字の性（rtags）を規定する論書である。その内容を『シトゥ大註』に与えられる科文に基づいて以下に示す。

第1偈：kali を表す文字の性を分類する。

第2-15偈：再後置字の性の分類によって動詞の三つの時制を定める。

²⁴シトゥは「初段の第五」について特別の説明を与えていない。彼自身の見解は不明である。

²⁵ST 15a6 を参照。

第 16–28 偈：後置字の性の分類によって音便と性一致の原則を定める。

第 29–31 偈：格助詞を理解しなければならない理由を説く。

第 32–36 偈：文字の必要性などを説く。

3.1.3 『大八処根本』

題目： *Gnas brgyad chen po'i rtsa ba. Aṣṭamahāpadamūla. Tohoku no. 4350.*

奥書： ce khyi 'brug gis byā ka ra ṇa'i skad mdo tsam zhig bsgyur ba gnas brgyad po'i rtsa ba rdzogs so || || (「チェ・キ・ドゥクが文法学の要語説明のみを翻訳した『大八処根本』が完成した。」)

同書は文法上重要な八項目、すなわち、[1] 行為参与者 (byed pa, *kāraka)、[2] 複合語 (bsdu ba, *samāsa)、[3] 語形成 (bsgyur ba)、[4] (肯定と否定の) 解釈 (drang ba)、[5] (音素・単語・文の) 導入法 ('jug pa)、[6] 格接辞 (rnam par dbye ba, *vibhakti)²⁶、[7] 部分的表現 (phyogs)、[8] 言葉の指示対象 (dngos po) を説く書である。

同書にはサンスクリット文法学の知識が多く見られる。『三十頌』と『性入法』の二者を除くと、サンスクリット文法学の模倣から始まっているチベット語文法学の発達史上、最初の画期的な文法書であると見ることができる。

3.1.4 『言葉の門』

題目： *Smra ba'i sgo mtshon cha lta bu. Vacanamukhāyudhopama. Tohoku. 4295.*

奥書： pañṭita dran pa'i ye shes grags pas mdzad pa smra ba'i sgo mtshon cha lta bu zhes bya ba rdzogs so || rgya gar gyi mkhan po dran pa ye shes grags pas | bla ma nor bzang grags pa las thos te | slob ma gzhon nu grags pa'i don du | ming gi sbyor ba ni cung zad bzhag | phrad kyi sbyor ba ni cung zad bshad nas bsgyur cing zhus te gtan la phab pa'o || || (「スムリティジュニャーナキールティ (Smṛtijñānakīrti) が著した『言葉の門・武器のような〔論書〕』というのが完成した。インドの学者スムリティジュニャーナキールティは師ノルサン・タクパ (Nor bzang grags pa, *Sudhanakīrti) の下で聴聞し、弟子ショヌ・タクパ (Gzhon nu grags pa) のために語の結合を少しばかり確定し、助詞の結合法を少しばかり説明し、翻訳・校正し、確定したものである。」)

『言葉の門』はインドからチベットに入り、後伝期の仏教復興を担った著者によるチベット語文法書であり、自註 (Tohoku no. 4296) と共に現存する。サキャ・パンディタ・クンガ・ギェルツェン (Sa kya Paṇḍita Kun dga' rgyal mtshan: 1182–1251) は『言葉の門の科文』において本書を音素 (yi ge, *varṇa) の部類、単語 (ming, *nāman)²⁷ の部類、文 (tshig, *vākya) の部類の三つの章に分けた後、さらに各章を区分している。『言葉の門』は主にチベット語における助詞について広く説明する。また、同書は『三十頌』に言及されていない内容についても新たに説明を与えている。ツェテン・シャブドゥンが『トンミの口伝』において、初期の重要なチベット語文法書として挙げる著作である。

²⁶ パーニニ文法学において vibhakti は格接辞だけではなく動詞活用語尾も含むが、ここでは格接辞のみが意図されている。

²⁷ チベット語の ming は、狭義においては名詞を意味するが、広義においては名詞、形容詞、動詞などを含む単語を意味する。サンスクリットの nāman の概念とは必ずしも一致しない点に注意が必要である。

3.2 12世紀–18世紀

以下に取り上げるのは、12世紀のサキャ・ソナム・ツェモ（Bsod nams rtse mos: 1142–1182）によって著作された『幼童入門』、13–14世紀のパン・ロトゥ・テンパ（Blo gros brtan pa: 1276–1342）によって著作された『三群（音素・単語・文）の解明』、サキャ・パンディタによって著作された『文字の結合』、12世紀のウパ・ロセル（Dbus pa blo gsal: 12世紀）の時代から18世紀までの間に作成された『三十頌』と『性入法』の註釈書群である。

3.2.1 『発音法・幼童入門』

題目： *Yi ge'i bklag thabs byis pa bde blag tu 'jug pa.*

奥書： dge bsnyen bsod nams rtse mos sbyar ba'o || || rked slas dam pa dang | dpal sa skya'i dben gnas dam par sbyar ba'o || phag lo rta'i tshes bcu gcig la tshar bar bgyis so || zhu ba po zhang ston phyar bu pas bgyis so || ||（「居士サキャ・ソナム・ツェモ（Bsod nams rtse mo: 1142–1182）が著作した。聖地ケレー（Rked slas）と吉祥なる聖地サキャ（Sa skya）の寂靜処において著作された。猪歳、馬の月（一月）の十一日に完成した。〔著作の〕請願者はシャントン・チャルブパであった。」）

作者サキャ・ソナム・ツェモはサキャ派五祖²⁸の第二番目として数えられる学者であり、サキャ・パンディタの叔父である。サキャ・パンディタが『幼童入門註』（*Byis pa bde blag tu 'jug pa'i rnam bshad*）を著作しており、同註釈によると、その内容は次の第三章に分けられる。

第1章：音素（*yi ge*）の要素（*bye brag*）と分類・包摂（*dbye bsdu*）の説明。

第2章：音素の発生源（*'byung gnas*）及び発声法（*'byin thabs*）と発音法（*bklag thabs*）の説明。

第3章：サンスクリット真言（*sngags, *mantra*）の発音法（*bklag thabs*）の説明²⁹。

3.2.2 『三群（音素・単語・文）の解明』

題目： *Tshogs gsum gsal ba.*

奥書： tshogs gsum gsal ba zhes bya ba 'di ni | lung dang rigs pa'i dbang phyug dam pa | dpal stag sde ba seng ge rgyal mtshan zhabs kyi bka' drin las lung dang rigs pa'i tshul gyi blo'i snang ba phra mo rnyed cing | de nyid sras kyi thu bo lo tsā ba rnam kyi rgyal mtshan gyi tog lta bu | shong ston rdo rje rgyal mtshan gyi legs par bshad pa'i srol dang | de'i sras dam pa bla ma lo tsā ba mchog ldan legs pa'i blo gros la sogs pa'i bka' drin las tha snyad gtsug lag rnam kyi rnam pa cung zad tsam mthong ba dpal ldan blo gros brtan pa zhes bya bas | blo gros dang brtson 'grus kyi stobs kyis rgyal ba'i bstan pa la khur 'dzin cing | dam pa'i chos ston pa'i dga' ston gyis gdul bya rnam kyi yid tshim par mdzad pa | dge ba'i bshes gnyen gzhon nu seng ge zhes bya ba'i gsung gis bskul te | mkhas pa du ma byon pa'i gnas e chos 'byung ba'i gtsug lag khang du sbyar ba legs par grub pa'o

²⁸祖師はクンガ・ニンポ（Kun dga' snying po: 1092–1158）である。第二世ソナム・ツェモ（Bsod nams rtse mo: 1142–1182）は祖師クンガ・ニンポの次男である。第三世タクパ・ギェルツェン（Grags pa rgyal mtshan: 1147–1216）は祖師クンガ・ニンポの三男である。第四世サキャ・パンディタ（Sa skya paṇḍita: 1182–1251）はタクパ・ギェルツェンの甥である。第五世ドゴン・パクパ（'Gro mgon 'phags pa: 1235–1280）はサキャ・パンディタの甥である。

²⁹TMZL 24a5 を参照。

||（「本書『三群（音素・単語・文）の解明』は、聖言と論理を自在にする偉大なお方、ペル・タクデパ・センゲ・ギェルツェン（Dpal stag sde ba seng ge rgyal mtshan）の下で、その御恩によって聖言と論理の理論に関する知識というわずかな智慧の光を獲得し、彼の最高の弟子である翻訳官達という勝利の旗の中で頂点に立つ者であるショントン・ドルジェ・ギェルツェン（Shong ston rdo rje rgyal mtshan）の妙説の伝統や、彼の偉大な弟子である師チョクデン・レクペー・ロドゥ（Mchog ldan legs pa'i blo gros）などの御恩によって、世俗の諸学問（tha snyad gtsug lag rnam）の内容に少しばかり目を通したペル・ロドゥ・テンパ（Blo gros brtan pa: 1276–1342）という者が、智慧や努力の力で勝者（仏陀）の教えという重荷を担い、無上法の教示という饗宴によって所化の者達の心を満足させる者、善知識ショヌ・センゲ（Gzhon nu seng ge）のお言葉に促されて、多くの学者達が輩出した聖地、エチュー・チュンワ（E chos 'byung ba）僧院において著作し、見事に完成したものである。」）

『三群（音素・単語・文）の解明』では、サンスクリット語の音素・単語・文を広く説明すると共に、チベット語の八つの格、格接辞の省略によって形成される六種の複合語、助詞と非助詞の区別、チベット語の綴字法（dag yig）に関する幾つかの誤解の排除、『言葉の門』に関する誤解の排除などを説明している。³⁰

3.2.3 『yi ge（音素・文字）の結合法』

題目： *Yi ge'i sbyor pa.*

奥書： sa kya paṅḍi tas sbyar pa'o ||（「サキヤ・パンディタが著作した。」）

サキヤ・パンディタ作『yi geの結合法』は、『性入法』と『三十頌』のほとんどの文章をそのまま引用して作られた著作である。内容と表現形式のいずれの点でも『性入法』と『三十頌』に合致しているため、本書はその二つの文法書の合成体といえることができる。20世紀の学者ツェテン・シャブドゥンは『トンミの口伝』においてこの著作を『三十頌』と『性入法』の註釈書としてみなしている³¹。しかし、『性入法』と『三十頌』の合成体に過ぎない本書を、それらの註釈書とみなして良いのかという点については疑問もある。現代の学者ティンレー・チューダク（Phrin las chos grags）、ダワ・ツェリン（Zla ba tshe ring）、チャペル・ツェテン・プンツォク（Chab spel tshe brtan phun tshogs）などは、『三十頌』と『性入法』の文言が『yi geの結合法』とほぼ一致することを根拠に、その二つの作品の真の作者はサキヤ・パンディタであって、七世紀のトンミではないと理解している³²。

最初にチベット語の yi ge（音素・文字）の説明がなされ、次にチベット語の音素の発声位置、基本文字・前置字・後置字に関する性入法の理論、完結重複助詞（go, ngo, do, no など）、八つの格、ni 助詞、dang 助詞、所有助詞（bdag sgra）、否定助詞、de 助詞などが順に述べられる。

3.2.4 ウパ・ロサル（Dbus pa blo gsal: 12世紀）による『三十頌』と『性入法』の註釈』

題目： *Sum cu pa'i 'grel pa.*

³⁰TMZL 24a2 を参照。

³¹TMZL 24a2 を参照。

³²DPLG 20.6ff. を参照。なお、同書によれば、チャペル・ツェテン・プンツォクに対する批判がシェーラプ・テンタル（Sher rab bstan dar: 1968–）とトツィク・チュータク（Spro tshigs chos grags: 1982–2015）によってなされている。

奥書: sum cu pa'i 'grel pa dbus pa blo gsal gyis slob ma la phan pa'i don du sbyar ba rdzogs so || dge'o || mang ga lam || || (「ウパ・ロサルが弟子の役に立つために著作した『三十頌』の註釈が完成した。善あれ。吉祥あれ。」)

題目: *Rtags kyi 'jug pa'i 'grel pa.*

奥書: rtags kyi 'jug pa'i 'grel pa dbus pa blo gsal gyis slob ma la phan pa'i don du shin tu gsal bar sbyar ba rdzogs so || dge'o || || (「ウパ・ロサルが弟子の役に立つために非常に明快に著作した『性入法』の註釈が完成した。善あれ。」)

サキャ・パンディタによる『yi ge の結合法』が『三十頌』と『性入法』の最初の註釈書であるとするならば、ウパ・ロサルによるこれらの作品は、現存する第二番目の註釈であることになる。彼の註釈は短く、彼以降の『三十頌』と『性入法』の多くの註釈のように、チベット語の la 助詞の用法などについて詳細な説明を与えていない。彼の註釈の影響により、12世紀以降、『三十頌』と『性入法』に対する多くの註釈が登場することになる。

3.2.5 ナムカ・サンポ大翻訳官 (Lo chen nam mkha' bzang po: 14世紀) による『三十頌』『性入法の註釈』

題目: *Sum cu ba'i 'grel pa bstan pa'i sgron me.*

奥書: sum cu ba'i 'grel pa bstan pa'i sgron me zhes bya ba 'di ni dpal e'i chos grwa chen por lo tsā ba nam mkha' bzang pos rang gzhan la phan pa'i phyir sbyar ba'o || (「本書『三十頌註・仏説灯明論』は、吉祥なる工大僧院 (dpal e'i chos grwa chen po) において翻訳官ナムカ・サンポが自他の役に立つように著した。」)

題目: *Bya ka ra ṅa'i rtags kyi 'jug pa'i 'grel ba mkhas pa'i rgyan.*

奥書: bya ka ra ṅa'i rtags kyi 'jug pa'i 'grel ba mkhas pa'i rgyan zhes bya ba dpal e'i chos grwa chen por lo tsā ba nam mkha' bzang pos sbyar ba rdzogs so || (「吉祥なる工大僧院 (dpal e'i chos grwa chen po) において翻訳官ナムカ・サンポが著した本書『ヴィアーカラナ性入法註・智者の飾り』が完成した。」)

ナムカ・サンポ大翻訳官は彼の『三十頌註』において、チベット語の yang 助詞、ang 助詞、nyid 助詞、ni 助詞、dang 助詞、呼びかけ表現などの用法に関して、それぞれに対応するサンスクリット語の例文を多く提示し、多くの点からサンスクリット語とチベット語の類似点を明らかにしようとしている³³。

3.2.6 シャル翻訳官 (Zha lu lo tsā ba : 1441–1527) による『三十頌』と『性入法』の註釈

題目: *Slob dpon a nus mdzad pa'i bod kyi skad kyi gsung rab la 'jug tshul sum cu ba'i rnam 'grel.*

奥書: bya ka ra ṅa'i rtsa ba sho lo ka sum cu pa zhes pa'i rnam par 'grel ba rdzogs so || (「ヴィアーカラナ根本偈『三十頌』の註釈が完成した。」)

題目: *Bya ka ra ṅa'i rtags kyi 'jug pa'i rnam par gsal ba'i legs bshad.*

³³DSPD 106.8ff. を参照。

奥書: bya ka ra ṅa'i rtags kyi 'jug pa' zhes bya pa'i bstan bcos slob dpon a nus mdzad pa'i rnam par bshad pa rdzogs so || (「軌範師アヌによって著されたヴィアーカラナ論書『性入法』の註釈が完成した。)」)

『三十頌』と『性入法』の本文を引用せずに、詩節に対する解釈のみを提示した註釈書である。前置字や後置字として使用不可能な文字 (mi 'jug pa'i yi ge, 例: ka, kha, ca, cha など) に関するウパ・ロサルの解釈への批判が見られる点や³⁴、インドのランジャンナー (Rañjanā) 文字をチベット文字の原型とみなす見解が示される点³⁵などが注目に値する。

3.2.7 ナムリン・パンチェン・クンチョク・チューダク (Rnam gling paṅ chen dkon mchog chos grags: 1646–1718) による『三十頌』と『性入法』の註釈

題目: *Lung du ston pa sum cu pa dang rtags kyi 'jug pa'i rnam 'grel legs bshad snang byed nor bu.*

奥書: なし

ラサの南に位置するロカ (Lho kha) 地方にあるナムリン (Rnam gling) の出身であることから、クンチョク・チューダクはナムリン・パンチェンの名で広く知られる。ナムリン・パンチェンの註釈書では la don 助詞の用法などについて詳しい説明が与えられ、彼独自の見解が示されるが、それらは彼以降のタティとシトゥという二人の文法学者によって多くの点から批判されている。特にタティは「ナムリン・パンチェン」や「ナムリンパ」というように批判対象となる学者の名前を示してから、『三十頌』に関して、『三十頌』に説かれる三宝に対する敬礼文における de la の la の解釈や, āli と kāli の解釈、完結重複辞 (slar bsdu) の解釈、la don 助詞の問題など、計十五個の問題点を挙げ、ナムリン・パンチェンの見解を批判している。シトゥはタティのように批判対象の名前を直接指していないが、ナムリン・パンチェンに対する多くの批判を展開する。

3.2.8 チョネ・タクパ・シェードゥブ (Co ne grags pa bshad sgrub: 1675–1748) による『三十頌』と『性入法』の註釈

題目: *Sum cu ba dang rtags kyi 'jug pa'i dgongs don gsal bar byed pa'i snang ba.*

奥書: ces sum cu ba dang rtags kyi 'jug pa'i dgongs don gsal bar byed pa'i snang ba zhes bya ba 'di ni | rgya thang bka' bcu 'jam dbyangs sbyin pa dang gnas brtan dpal 'byor rgya mtsho gnyis kyis bskur ngor | shākya'i dge slong grags pa bshad sgrub kyis sbyar ba'o || || (「以上の『三十頌・性入法密意解明』というこの作品は、ギャタン・カチュ・ジャムヤン・ジンパ (Rgya thang bka' bcu 'jam dbyangs sbyin pa) とネーテン・ペルジョル・ギャムツォ (Gnas brtan dpal 'byor rgya mtsho) の二人からの請願に応じて、釈迦の〔教えに従う〕比丘タクパ・シェードゥブが著作したものである。)」)

東アムドのチョネ地方出身の学者チョネ・タクパ・シェードゥブの註釈書である。彼の『三十頌』と『性入法』の註釈書は、比較的分量も少なく、理解しやすいものである。全体として見れば他の学者に対する批判はあまり含まれないが、『三十頌』の敬礼文における la don 助詞の意味、完結重複辞、la don 助詞の例文などに関して、ナムリン・パンチェンの解釈に見られる問題点を指摘しているのが注目される。また、他の項目に関しては、シャル翻訳官などの見解を批判し、ナムリン・パンチェンの見解を支持している場合もある。

³⁴DSPD 56.7ff. を参照。

³⁵DSPD 51.13ff. を参照。

3.2.9 タティ・リンチェン・トンドゥブ（*Pra ti rin chen don grub*: 17世紀末–18世紀初）が著作した『タティの註釈』

題目： *Sum cu pa'i rnam bshad kun bzang dgongs rgyan.*

奥書： zhes pa 'di yang bdag gi mkhan rin po che blo bzang sbyin pa'i zhal snga nas dang | gzhan yang don gnyer can du mas nan gyis bskul ba la brten nas dka' bcu'i ming can ratna artha siddhis bgyis pa'o || || (「本書は私の師であるケンリンポチェ・ロサン・ジンパ (Mkhan rin po che blo bzang sbyin pa) 様や他の幾人もの学者達が強く請願したのを受けて、カチュ (dka' bcu) 学位の称号を持つラトナールタシッディ (Ratnārthasiddhi) が著作したものである。」)

題目： *Rtags kyi 'jug pa'i dgongs 'grel.*

奥書： zhes pa 'di yang don gnyer can du ma'i ngor | bka' bcu'i ming can ratna artha siddhis bgyis pa dge legs 'phel || mang ga lam || (「本書もまた、幾人もの学者達のために、カチュ (dka' bcu) 学位の称号を持つラトナールタシッディが著作したものである。善が広がりますように。吉祥あれ。」)

東アムドのバリ (Dpa' ris) 地方にあるタティ (タティのチベット語表記として *Pra ti*、*Bra ti*、*Pra sti*、*Pra bsti* など様々ある) 出身でゲルク派の著名な学者である。タティ・リンチェン・トンドゥブは幼少時にセラ寺 (Se ra dgon) に入り、ショク・トンユー・ケドゥブ (*Zhogs don yod mkhas grub*: 1683–1738) などの師の下で仏教を学んだ。タティは『三十頌註』において、格助詞の用法やそれらの例文など、多くの点についてナムリン・パンチェンをはじめとする彼以前のチベット文法学者達の見解を批判した上、彼自身の見解を示している。一方、彼の『性入法註』は非常に簡潔なものである。『三十頌註』のように多くの例文が与えられることはなく、他の学者の見解に対する批判が展開されることもない。詩節についての逐語的な説明しか与えられないため、彼の『三十頌註』ほどには広く学ばれていない。

3.2.10 シトゥ・パンチェン (*Si tu pañ chen*: 1699/1700–1774) が著作した『シトゥ大註』

題目： *Sum cu ba dang rtags kyi 'jug pa'i gzhung gi rgyas 'grel mkhas pa'i mgul rgyan mu tig phreng mdzes.*

奥書： ces sum cu ba dang rtags kyi 'jug pa'i gzhung gi rgyas 'grel mkhas pa'i mgul rgyan mu tig phreng mdzes 'di ni don gnyer can du mas sngon du yang yang bskul ba la brten nas ldom bu pa gtsug lag chos kyi snang ba zhes bya bas rang lo sum cu ba la gzhung snga ma'i 'grel pa brtsams pa g-yeng ba'i rkyen du mas 'phror lus shing | slar rang lo sum cu rtsa bdun du son pa me 'brug lor | grub pa'i rigs su 'khrungs shing gtsug lag mang por gzigs pa'i spyen ras pad ma'i 'dab ma ltar yangs pa gangs can gyi sa'i dbang phyug dam pa'i bka'i mdun na 'don chen po'i chen por gyur pa zhabs drung mdo mkhar ba tshe ring dbang rgyal gyi zhal snga nas me tog dang bcas te dngos su skul bar mdzad pa dang | slar yang bka' drin gyi sgo nas yang yang skul bar mdzad pas bka' bzhin bgyid par yid la brnag kyang skabs 'gar bsnyen sgrub sogs chos ldan gyi bya ba dang phal cher bzlog tu med pa'i gzhan dbang gi khol bo nyid du 'phyan pa'i rnam par g-yeng ba bar med du gtibs pas re zhig 'gyang yang | rang lo bzhi bcu rtsa lnga par son pa rab byung bcu gnyis pa mig dmar shing pho byi ba'i lor sngar brtsams zin pa rnams la dag ther dang | snga ma'i 'phros dang rtags 'jug gi 'grel ba bcas sbo zla ba'i dbang phyogs zla ba gro zhun gyi 'grub sbyor dang ldan pa'i rgyal ba'i tshes kyi nam langs 'khrul med bdud rtsi thun mtshams dang ldan pa'i dus dge bar thub bstan chos 'khor gyi gtsug lag khang du yongs su grub pa 'di'i dge bas bde bar gshegs

pa'i bstan pa rin po che phyogs dus gnas skabs thams cad du dar zhing rgyas la yun ring du gnas pa dang lus can mtha' dag smra ba'i dbang phyug thams cad mkhyen pa'i go 'phang thob pa gyur cig | sarvakāle shreyo bhavatu || || (「以上の『三十頌・性入法大註・智者の首飾りとなる連珠』という本書は〔以下のような経緯で著作されたものである。〕かつて幾人もの学者達が何度も請願したのを受けて、遊行者ツクラ・チューキ・ナンワ (Gtsug lag chos kyi snang ba) という者 [=シトゥ] が三十歳 (1729年) の時に論書の前半部を著作したが、集中力の欠如などの幾つかの理由により未完成の著作となっていた。その後、三十七歳に達した時、すなわち、火辰の年 (1736年) に、成就者の家系にお生まれになり、数多くの論書をみわたす蓮華の花びらのように広い眼を持っておられる雪国チベットの地の自在者 (ダライ・ラマ) に仕える最高的大臣であるシャブドゥン・ドンカルワ・ツェリン・ワンギェル (Zhabs drung mdo mkhar ba tshe ring dbang rgyal: 1697-1763) 様によって花の贈り物と共に直接請願され、その後も繰り返し請願されたので、お言葉通りに実行しようと決心したが、ある時には念修などの仏法に関係した為すべきことがあり、また多くの場合には断ることのできない他者に支配される使用人となって外出するといった集中を奪われる状況に絶えず襲われたので、ひとまず著作を延期していた。しかし、私が四十五歳に達した第12ラプチュンの甲子の年 (1744年) に、私が以前に著述したものを修正し、前半部の続きと、『性入法』の註釈を加えて、二月下旬の牛宿 (gro zhun) の遇合 (grub sbyor) を有する勝利の日 (18日・23日・28日) のちょうど夜が明けた時、吉祥なる時に、トゥプテン・チューコル僧院 (Thub bstan chos 'khor gyi gtsug lag khang) において〔本書は〕完成した。この〔著述という〕善行によって、善逝の宝のような教えが全世界において常に繁栄し永続し、一切の衆生が言葉の自在者である一切智者の境地を獲得できますように。全ての時にわたってご加護がありますように (sarvakāle śreyo bhavatu)。〕)

シトゥ・パンチェンは東チベットに属するカム地方のデルゲ (Sde dge) 出身で、カルマ・カギユ派の著名な学者である。ネパール (Bal yul) を二回、ラサを五回訪問し、ネパール人学者の下でサンスクリットを学習した。また、ギェルモ・ツァワ・ロン (Rgyal mo tsha ba rong, 現代の四川省アバ・チベット族チャン族自治州を中心とする地方に相当) や雲南 (Yun nan) を訪れ、言語調査を行なったことが知られている。シトゥ・パンチェンはサンスクリット文法学、サンスクリット辞書学、チベット語文法学、俱舍学、医学などに精通した学者であり、全14秩に及ぶ著作集を残している。

シトゥは1729年から1744年までの十五年間にわたって『シトゥ大註』を著作した。奥書によると、同書は1744年2月下旬に完成している。サンスクリット文法学の知識を用いてチベット語の用法を理論的に正当化しようとしているのは『シトゥ大註』の大きな特色である。また、シトゥは幾つかの重要な問題に関して、[1] 他説に対する批判、[2] 自説の確立、[3] 誤解の排除という三部構成の議論を展開している。『シトゥ大註』の誕生とともに、チベットではタティの見解に従うタティ学派 (Pra ti'i lugs) と、シトゥの見解に従うシトゥ学派 (Si tu'i lugs) という二つの文法学派が発生した。後代の文法学者達の内、ツェテン・シャブドゥンとムゲ・サムテンはタティ学派であり³⁶、ダルマバドラとヤンチェン・ドゥッペー・ドルジェはシトゥ学派である。現代でもこの二つの文法学派の伝統が続いている。シトゥの生涯およびチベット語文法略史の中での『シトゥ大註』の位置づけについては後述する。

³⁶ツェテン・シャブドゥンはタティの見解を全面的に受け入れているわけではない。例えば、las 助詞が sdud pa (包摂) の意味で使用されるかという問題に関しては、タティの見解を部分的に批判し、ツェテン・シャブドゥン自身の見解を展開している。

3.3 19 世紀–20 世紀

チベット語文法学の歴史において大きな貢献を果たしたのはタティとシトゥの二人である。彼らが活躍した 18 世紀以降に現れたチベットの文法学者はいずれもこの二人の影響を受けており、タティもしくはシトゥのいずれかの見解を継承、または批判、または部分的に修正することによって、文法学の理論を発展させている。以下では 19 世紀から 20 世紀に現れた文法学者とその著作を見ることにする。

3.3.1 アラクシャ・ガワン・テンタル (A lag sha ngag dbang bstan dar: 1759–1831?) による『三十頌』と『性入法』の註釈

題目： *Sum cu pa dang rtags 'jug gi don go sla bar bsdus pa'i bshad pa skal ldan yid kyi pad ma 'byed pa'i snang ba'i mdzod.*

奥書： ces sum cu pa dang rtags 'jug gi don go sla bar bsdus pa'i bshad pa skal ldan yid kyi pad ma 'byed pa'i snang ba'i mdzod ces bya ba 'di ni lha ldan smon lam chen mo'i grwa skor ba a lag sha bstan dar gyis sbyar ba'o || || (「三十頌・性入法の内容を分かりやすくまとめた解説書『有縁者の心という蓮華を開花させる光の蔵』と題する本作品は、ラデン・モンラム・チェンモ (Lha ldan smon lam chen mo) 大法会の論客 (Grwa skor ba) アラクシャ・テンタルが著作したものである。)」)

アラクシャ・ガワン・テンタルは内モンゴルのアラクシャ出身の学者である。幼少時にラサのデプン寺 ('Bras spungs dgon pa) ゴマン (Sgo mang) 学堂に入り、1791 年にはデプン・ゴマン学堂の学堂長 (Mkhan po) に着任した。ロンドル・ラマ (Klong rdol bla ma: 1719–1794) の下で『三十頌』と『性入法』と『詩学』を聴聞した。五十一歳の時、ラプラン (Bla brang) 僧院において、ドラムパ・ラシェ (Rdo rams pa lha zhe) の下で『詩鏡』(Kāvyaḍarśa) に対するダライ・ラマ五世の註釈『文殊喜歌』(Dbyangs can dgyes glu) を学んだ。彼は『三十頌』と『性入法』に対する註釈の他に、チベット語文法学関連の著作として『文字音声論・学者の口飾り』(Yi ge'i bshad pa mkhas pa'i kha rgyan) や『綴字論集』(Dag yig gces bsdus) なども著しており、しばしば他の学者達の見解を批判している。しかし、彼の yang 助詞の解釈などは、20 世紀のムゲ・サムテン (Dmu dge bsam gtan: 1914–1993) によって批判される。

3.3.2 ダルマバドラ (Dharmabhadra: 1772–1851) による『シトゥの口伝』

題目： *Yul gangs can gyi skad kyis brda sprod pa'i bstan bcos sum cu pa dang rtags kyi 'jug pa'i rnam bshad mkhas mchog si tu'i zhal lung.*

奥書： ces yul gangs can gyi skad kyis brda sprod pa'i bstan bcos sum cu pa dang | rtags kyi 'jug pa'i rnam bshad mkhas mchog si tu'i zhal lung zhes bya ba 'di ni | sdom brtson mang du thos pa'i dge slong jñā na mi tras nan chen mos bskul ma mdzad pa la brten nas mkhas grub dam pa ngag dbang rdo rje dpal bzang po'i zhabs kyi rdul spyi bos reg cing | spel khang paṅḍita chen po'i zhal gyi bdud rtsi cha shas tsam myangs pas bod kyi brda dag gi bstan bcos phal mo che'i dgongs don smra ba la mkhas pa'i mdun sar mi zhum pa'i spobs pa cung zad thob pa'i śākya'i dge slong dharmabhadra zhes bya bas sum rtags dang smra sgo dang mkhas pa'i kha rgyan la sogs pa'i bod kyi brda sprod pa'i bstan bcos rtsa 'grel mang po la zhib tu dpyad de de dag gi legs cha dag phyogs gcig tu btus nas rang lo so lnga pa zad pa zhes pa me stag lo'i gro bzhin zla ba'i dkar tshes dga' ba dang po'i nyin gtsang g-yas ru bzhad kyi bye brag dngul chu'i ri khrod dga' ldan rtse'i spong

khang du sbyar ba 'dis kyang rgyal ba'i bstan pa rin po che gangs can gyi ljongs su yun ring du gnas pa'i rgyu byed nus par gyur cig || || (『チベット語文法書三十頌および性入法の註・最高の学者シトゥの口伝』と題する本書は〔以下のような経緯で著作されたものである。〕多聞の僧侶である比丘ジュニャーナミトラが非常に熱心に請願したのを受けて、最高の学者にして成就者であられるガワン・ドルジェ・ペルサンポ (Ngag dbang rdo rje dpal bzang po) のおみ足に付着した塵に頭頂をつけて礼拝し、ペルカン・パンディタ・チェンポ (Spel khang paṇḍita chen po) のお口の甘露をわずかばかり賞味したことにより、大部分のチベット語文法書書の秘められた意味を論じることにかけては、学者達の集会の場においても挫けることのない弁才を幾らか持つ釈迦の〔教えに従う〕比丘ダルマバドラという者が、『三十頌』、『性入法』、『言葉の門』、『学者の口飾り』などの多くのチベット語文法書の本頌および註釈書を詳細に考察し、それらの良い点の一つにまとめ、私が三十五歳を終える丙寅年（1806年）の七月一日に、ツァン・イエ・ルシェ (Gtsang g-yas ru bzhad) 地方の一部であるグルチュ山洞窟ガンデン・ツェポンカン (Dngul chu'i ri khrod dga' ldan rtse'i spong khang) において著作した。これも勝者の宝のような教えがチベット地域に永続する要因となることを願う。)

ダルマバドラの『シトゥの口伝』は、『シトゥ大註』におけるシトゥの見解の要点を短くまとめたものである。シトゥによる他の学者に対する考察や批判などについては言及されず、『シトゥ大註』に比べて平易で、理解しやすいものである。現代のチベット民族学校でも、教材として広く学ばれる作品である。

3.3.3 ヤンチェン・ドゥブペー・ドルジェ (Dbyangs can grub pa'i rdo rje: 1809–1887) による『三十頌』と『性入法』の概説

題目： *Thon mi'i legs bshad sum cu ba'i snying po legs bshad ljon pa'i dbang po.*

奥書： tshig gi lo mas ma bsgribs shing || don gyi 'bras bu g-yur za ba'i || legs bshad ljon pa'i dbang po 'di || dbyangs can grub pa'i rdo rjes spel || śubham | (「言葉という葉で覆い隠されることなく、意味という果実が熟している本書、善説という如意樹 (legs bshad ljon dbang) は、ヤンチェン・ドゥブペー・ドルジェが著作したものである。幸あれ。)」

題目： *Rtags kyi 'jug pa'i snying po'i don mdo tsam brjod pa dka' gnad gsal ba'i me long.*

奥書： ces rtags kyi 'jug pa'i snying po'i don mdo tsam brjod pa dka' gnad gsal ba'i me long zhes bya ba 'di ni || rang gi slob bu rje drung sangs rgyas rgya mtsho dang don grub phun tshogs gnyis kyis dgos tshul ltar || mkhas mchog si tu paṇ chen dang thams cad mkhyen pa dharmabhadra dpal bzang po'i bzhed pa dang mthun par dbyangs can grub pa'i rdo rjes sbyar ba'o || (『性入法要義を略説した難所解明鏡論』と題する本書は、私の弟子ジェドゥン・サンギェ・ギャムツォ (Rje drung sangs rgyas rgya mtsho) とトンドゥブ・プンツォク (Don grub phun tshogs) の二者による請願の通りに、最高の学者シトゥ・パンチェンと一切智者ダルマバドラ・ペルサンポのご見解に従って、ヤンチェン・ドゥブペー・ドルジェが著作したものである。)」

ヤンチェン・ドゥブペー・ドルジェはダルマバドラの弟である。詩節の形で書かれた『善説如意樹』と『難所解明鏡論』はそれぞれ『三十頌』と『性入法』の内容に一致し、『三十頌』と『性入法』の内容を理解し易い形で示したものであるので、初学者への手引書として現代に至るまで用いられる書である。

3.3.4 セルトク・ラマ・ロサン・ツルティム・チュタック (Gser tog bla ma blo bzang tshul khrims chos grags: 1845–1915) による『セルトク文法書』

題目： *Bod kyi brda sprod pa sum cu pa dang rtags kyi 'jug pa'i mchan 'grel mdor bsdus te brjod pa ngo mtshar 'phrul gyi lde mig.*

奥書： ces bod kyi brda sprod pa sum cu pa dang rtags kyi 'jug pa'i mchan 'grel mdor bsdus te brjod pa ngo mtshar 'phrul gyi lde mig ces bya ba 'di ni | snga dus rang lo bcu gnyis pa nas brtsams te | bka' drin can mtshungs med yongs 'dzin rdo rje 'chang ngag dbang chos grags kyi spyang sngar | sum rtags snyan ngag sogs rig gnas du ma mdzub khrid kyis sbyangs pa cung zad bgyis na'ang | de phyin rang nyid kyis gshar sbyang sogs ma byas shing gzhan la khrid spel sogs kyang ma byung bas phal cher brjed nges kyi ngang du thim 'dug pa las | glo bur du de ltar rtsom na snyam pa'i rnam rtog cig gis rkyen byas pa la brten nas | gser tog skyes ming 'dzin pa'i sngags 'chang gyi na pa blo bzang tshul khrims rgya mtshos rang lo zhe bdun pa'i steng | gangs ri lnga dang mtsho mdun gyis mdzes par brgyan pa'i yul ljongs khur lugs kyi sa'i cha gser thang zhes bya bar sug bris su bgyis pa'o || mang ga lam || || (「チベット語文法書『三十頌』と『性入法』に対する簡潔に記された註釈『奇幻鍵論』と題する本書は〔以下のような経緯で著作されたものである。〕私は幼少の十二歳の時から、無上の恩恵をもたらして下さった師である金剛手ガワン・チュータク (Ngag dbang chos grags) の御前で、文法学 (『三十頌』『性入法]) や詩学などの多くの学問を、個人指導を通じて少しばかり学習した。しかし、それ以後、私自身は復習などをせず、他人に教授することなどもしなかったため、大部分を忘失した状態になってしまった。その後、突然『このように著作したらどうだろうか』という考えがきっかけとなり、セルトク化身の名称を持つ密教修行者の私、ロサン・ツルティム・ギャムツォが四十七歳の時に、五つの雪山と七つの湖で美しく飾られた地域クルルク (Khur lugs) 地方の一部であるセルタン (Gser thang) という所で〔本書を〕筆写した。〕)

セルトク・ラマの註釈は、『三十頌』と『性入法』の本文の内容を彼自身による詩節でまとめた後、理解しやすい例文を提示し、必要に応じてソナム・ツェモやアラクシャ・ガワン・テンタルなどの学者の言葉を引用して議論を展開するという形式を取っている。『三十頌』については、nas 助詞と las 助詞の用法の一つである sdud pa (包摂/境界確定) などに関するシトゥの註釈について、疑問点を提示している点が注目される。『性入法』に関しても、アラクシャ・ガワン・テンタルによる説明などをしばしば引用して議論を展開している。また、セルトク・ラマの重要な成果として、巻末に与えられる動詞活用表がある。これはそれ以前には例のない、まとまった動詞活用表である。

3.3.5 ツェテン・シャブドゥン (Tshe tan zhabs drung: 1910–1985) による『トゥミの口伝』

題目： *Gangs can bod kyi brda sprod pa'i bstan bcos sum cu ba dang rtags 'jug gi rnam bzhag rgya cher bshad pa thon mi'i zhal lung.*

奥書： ces gangs can bod kyi brda sprod pa'i bstan bcos sum cu ba dang rtags 'jug gi rnam bzhag rgya cher bshad pa thon mi'i zhal lung zhes bya ba 'di ni | tshe tan zhabs drung 'jigs med rigs pa'i blo gros sam ming gzhan ngag dbang dbyangs ldan rig pa'i 'dod 'jo zhes 'bod pas ris su ma bca'd pa'i blo gsal don gnyer dang ldan pa rnam la gangs can bho ta'i brda sprod rig pa 'di las rang gi shes tshod tsam zhig skyes kyi tshul du phul ba ste | rab rgyal bgrang bya lnga gsum pa don grub ces pa sa mo lug gi lo'i (1979) dbyar gyi dus su rtsom pa'i 'go btsugs nas lo de ga'i ston gyi mjug cha la legs par brtsams grub pa'i dge bas rig pa'i gzhung lugs kyi rtsa bar gyur pa sum cu ba dang rtags

'jug 'di nyid kyi 'phrin las dar zhing rgyas par gyur cig || ||（「本書『チベット語文法三十頌・性入法の広説・トゥミの口伝』は、ツェテン・シャプドゥン・ジクメ・リクペー・ロドゥ、別名ガワン・ヤンデン・リクペー・ドジョという者が、学派意識にとらわれずに研究に努める智慧者達のために、チベット語文法の内、自分が知る限りのものを贈り物として捧げたものである。第53ラプギェル（Rab rgyal）のトンドゥブ（Don grub）という年、すなわち乙丑年の年（1979年）の夏季に執筆を始め、同年の秋の終わりに完成したものである。この善業によって学問体系の根本となるまさにこの『三十頌』と『性入法』の働きがより一層広がりますように。」）

ツェテン・シャプドゥンの註釈『トゥミの口伝』では、トンミ・サンボータ（トゥミ）の生涯、トンミによるチベット文字の制定、チベット語のa系列音（āli）とka系列音（kāli）の確定について論じられた後、『三十頌』に説かれる格助詞の用法と、『性入法』に説かれる文字の性の区別やその用法などに関するそれぞれの問題点が考察される。[1] 他説に対する批判、[2] 自説の確立、[3] 誤解の排除という三部構成の議論を展開している点に構成上の特徴がある。『トゥミの口伝』は、タティヤシトゥなどの学者達の見解を批判的に考察しながら、幅広い点からチベット語文法の問題点を吟味しているため、古典チベット語文法の研究において極めて重要な文献資料である。

現在のチベットで、チベット語文法の初学者は最初にヤンチェン・ドゥブペー・ドルジェの『善説如意樹』と『難所解明鏡論』を学習し、次にツェテン・シャプドゥンの『トンミの口伝』を通じて『三十頌』と『性入法』の理解を深めることが通例となっている。

3.3.6 ムゲ・サムテン（Dmu dge bsam gtan: 1914–1993）による『智者入門』と『智者饗宴』

題目： *Yi ge spyi rnam blo gsal 'jug ngogs.*

奥書： yi gspyi rnam blo gsal 'jug ngogs zhes bya ba 'di ni dpyod ldan du mas bskul ba ltar | bsam gtan rgya mtsho mi 'jigs dbyangs can dga' ba'i blo gros su 'bod pas | mkhas pa dag la mi mkho na'ang gсар slob 'ga' la phan srid snyams te snga mo zhig nas mgo brtsams na'ang bar skabs shig nas rkyen dbang gis mtshams 'jog dgos byung | nye char rnga ba bod rigs rang skyong khul gyi tang u'i chog mchan ltar dril bsgrags pus 'go khrid 'og bod yig sbyong brdar gyi gros tshogs 'tshogs dus phran gyis slob dpon gyi khur len dgos byung skabs mjug rdzogs par bris pa'o ||（「本書『チベット語 yi ge の概説・智者入門』は、多くの学者達からの請願を受けて、サムテン・ギャンツォ・ミジク・ヤンチェン・ガウエ・ロドゥ（Bsam gtan rgya mtsho mi 'jigs dbyangs can dga' ba'i blo gros）と称する者が、『諸学者にとっては不要であるかもしれないが、ある初学者には役に立つことがあるかもしれない』と考えて、以前から書き始めていたが、途中で他の要因によって中断を余儀なくされていたところ、最近、ガワ・チベット自治区党委からの認可を受けて、宣伝部の主導の下でチベット語学習会を開催した時、わたくしが教師の任務を担うことになった際に、書き終えたものである。」）

題目： *Brda sprod blo gsal dga' ston.*

奥書： ces brda sprod blo gsal dga' ston zhes bya ba 'di ni | bsam gtan rgya mtsho mi 'jigs dbyangs can dga' ba'i blo gros su 'bod pas spyi lo 1979 ba'i spyi zla brgyad pa nas mgo bzung ste | rnga ba bod rigs rang skyong khul gyi bod kyi brda sprod sbyong brdar 'dzin grwa thengs gnyis pa 'tshogs skabs bris pa dge legs 'phel |（「本書『[チベット語] 文法書・智者饗宴』は、サムテン・ギャンツォ・ミジク・ヤンチェン・ガウエ・ロドゥと称する者が1979年8月から著作を開始し、第二回ガワ・チベット自治区チベット語文法学習会を開催した時に書き〔終えた〕ものである。善が広がりますように。」）

ムゲ・サムテンは東アムドのムゲ地方のロンデェ村に生まれ、十一歳の時、出家して文字の読み書きや、初級ドゥラなどを学んだ。二十歳の時、ラプラシ僧院に入門し、仏教哲学を広く学び、オーム・キルパ（Om 'khyil ba）師の下で『三十頌』、『性入法』、『詩鏡』を聴聞した。三十七歳の時、北京の中央民族事務委員会で漢蔵翻訳の仕事に携わったことや、六十二歳の時、成都で『蔵漢大辞典』の編集に参加したことなどは重要な功績である。七十歳の時、北京で十二日間開催された少数民族言語科学討議会に参加し、文化大革命後に書かれた『要集』（*Gnad bsdus*）という悪名高いチベット語文法書を批判し、その非文法性を明らかにしたことは良く知られている。また、初学者向けの教科書として『智者入門』と『智者饗宴』などの作品を著作し、チベット語の復興に大きな貢献をした³⁷。

『智者入門』では、『三十頌』の助詞の理論と『性入法』の文字論について、平易な解説と例文を示した後、付論として作文法や『三十頌』と『性入法』の詩節に対する解釈も示している。『智者饗宴』では、主にチベット語における *yi ge*（文字・音素）の概念規定とその分類、単語論、文章論などを広く論じている。同書において、*yi ge* を一次的な *yi ge* (*yi ge dngos gnas pa*) と二次的な *yi ge* (*yi ge btags pa pa*) の二者に分けているのが注目される。

4 結論

以上、トンミによるチベット文字の制定と文法書著作の経緯を説明した後、チベット語文法学の歴史を便宜的に三つの時代に区分して、現存する古典期のチベット語文法書の内、著名な作品を説明した。

『三十頌』と『性入法』がトンミの真作であるかという問題については、現代の学者達の間で様々に議論されているが、チベットの伝統的な説によれば、『三十頌』、『性入法』、『大八処根本』、『言葉の門』の四書はチベット初の画期的な文法書であるということになる。『大八処根本』と『言葉の門』はサンスクリット語とチベット語の両方を扱う文法書でもある。このことが示唆するのは、チベット語文法学はその最初期の段階から、サンスクリット文法学と密接な関係を有し、その影響下にあったということである。

12世紀のウパ・ロセルの時代から18世紀のナムリン・パンチェン以前の時代までに、『三十頌』と『性入法』の註釈書が多く著作されたが、そこでは簡潔な語釈のみが提示され、詳しい議論が展開されることはなかった。ナムリン・パンチェンは助詞の用法などについて、彼以前には見られなかった詳細な議論を展開し、チベット語文法学の発展において重要な業績を残したが、後に現れたタティによって批判された。さらに、その後、シトゥはナムリン・パンチェンとタティの二者を含む、過去の多くの学者達の解釈を批判している。その点から見れば、ナムリン・パンチェンの文法学は、後のタティ学派とシトゥ学派の形成に大きな影響を与えたと考えられる。シトゥ文法学の出現によって、チベット語古典文法学の流儀はタティ流とシトゥ流の二派に分かれるようになった。それ以降の文法学者達は、必ずしもその二派のいずれかに属するということはなく、二派のそれぞれの長所を取り入れた融合的解釈も生まれたが、タティ流とシトゥ流という二つの流れは、18世紀以降のチベット語文法学において無視できない存在となった。さらに、ツェテン・シャブドゥンやムゲ・サムテンが登場した20世紀後半になると、文化大革命によって混乱が生じていたチベット語の復興を目指す文法書が登場し、『三十頌』と『性入法』の詩節に対する解釈のみではなく、現代の言語学の知見を取り入れた新たな表現形式で、伝統的なチベット語文法学の再評価が論じられるようになった。

³⁷ムゲ・サムテンに関する他の事跡は、彼自身による『自伝鏡論』（*Rang rnam a dar sha*）に詳しく説かれている。

略号及び参考文献

一次資料

KĀ III *Kāvyaḍarśa* Chapter 3 (Daṇḍin): see Dimitrov 2011.

KGMZ *Gangs can mkhas grub rim byon ming mdzod* (Go shul grags pa 'byung gnas dang rgyal ba blo bzang mkhas grub). Xining: Mtshon sngon mi rigs dpe skrun khang. 1992

KSGG *Pra ti'i sum rtags 'grel ba kun bzang dgongs rgyan* (Pra ti rin chen don grub). Xining: Mtshon sngon mi rigs dpe skrun khang. 1994.

GRSM *Rgyal rab gsal ba'i me long* (Sa skya bsod nams rgyal mtshan). Beijing: Mi rigs dpe skrun khang. 2002.

GRST *Gtam rgyud gser thang* (Dge 'dun chos 'phel). Chendu: Si khron mdzes rtsal thum sgril par 'debs bzo grwa. 1994.

CBKG *Chos 'byung mkhas pa'i dga' ston* (Dpa' bo gtsug lag phreng ba). Beijing: Mi rigs dpe skrun khang. 2006.

TMZL *Thon mi'i zhal lung* (Tshe tan zhabs drung). Mthu ba dgon ed.

DKTZ *Dung dkar tshig mdzod* (Dung dkar blo bzang 'phrin las). Beijing: krung go'i bod rig pa dpe skrun khang. 2002.

DYGP *Dag yig gab pa mngon byung* (Dpa' ris sangs rgyas). Xining: Mtsho sngon mi rigs dpe skrun khang. 1999.

DSNT *Dam pa bde gshegs kyi nam thar bsodus pa grub mchog rjes dran* (Lding po ba). TBRC: W26096-11CZ2033.

DTPY *Deb ther dpyid kyi rgyal mo'i glu dbyangs* (Rgyal dbang lnga ba ngag dbang blo bzang rgya mtsho). Beijing: Mi rigs dpe skrun khang. 1980.

DSPR *Bod kyi brda sprod rig pa'i gzhung lugs kyi 'phel rim 'gar thog mar dpyad pa* (Chab spel tshe brtan phun tshogs). Beijing: Krung go'i bod rig pa. 2006.

DPLG *Brda sprod le'u brgyad ma* (Shis tshang mkhyen rab). Lanzhou: Kan su'u mi rigs dpe skrun khang. 2017.

DSPD *Bod kyi brda sprod phyogs bsgrigs I*. Chendu: Si khron mi rigs dpe skrun khang. 2014.

DSNT *Bod kyi brda sprod nag tik* (Na ga sangs rgyas bstan dar). New Delhi: Bod kyi dpe mdzod khang. 2017.

PhML *Bstan pa snga dar gyi chos 'byung 'brel yod dang bcas pa'i dus rabs kyi mtha' dpyod 'phrul gyi me long* (Khang dkar tshul khriims skal bzang). New Delhi: Western Tibetan Cultural Association. 1985.

BT *Bu ston chos 'byung* (Bu ston rin chen grub). Beijing: Krung go'i bod rig pa dpe skrun khang. 1998.

SG *Si tu'i sum rtags 'grel chen* (Si tu paṇ chen chos kyi 'byung gnas). Xining: Mtsho sngon mi rigs dpe skrun khang. 2001.

ST *Gser tog sum rtags* (Gser tog bla ma). Lanzhou: Kan su'u mi rigs dpe skrun khang. 1981.

二次資料

Dimitrov, Dragomir

2011

Śabdālamkāraḍavibhāga: Die Unterscheidung der Lautfiguren und der Fehler, kritische Ausgabe des dritten Kapitels von Daṇḍins Poetik Kāvyaḍarśa und der tibetischen Übertragung Sñan nag me loṅ samt dem Sanskrit-Kommentar des Ratnaśrījñāna, dem tibetischen Kommentar des Dpañ Blo gros brtan pa und einer deutschen Übersetzung des Sanskrit-Grundtextes. Band 2. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

Graf, Alexander

2019

“Tibetan Grammar: Si tu Pañchen and the Tibetan adoption of linguistic knowledge from India.”
Inauguraldissertation zur Erlangung der Doktorwürde der Philosophischen Fakultät der Universität Heidelberg.

Miller, Roy Andrew

1976

Studies in the Grammatical Tradition in Tibet (Amsterdam Studies in the Theory and History of Linguistic Science. Series iii—Studies in the History of Linguistics, vol. 6.). Amsterdam: John Benjamins B.V.

稲葉 正就

1986

『チベット語古典文法学』法蔵館

今枝 由郎（監訳）

2015

『チベット仏教王伝：ソンツェン・ガンボ物語』岩波文庫

山口 瑞鳳

1983

『吐蕃王国成立史研究』岩波書店

（パンチェン・トンドゥブ、広島大学大学院博士課程後期 [インド哲学]）

A Brief History of Tibetan Grammar

Paṅ chen don grub

This paper aims to make a brief introduction to the Tibetan grammar by dividing its history into three periods for the convenience of explanation, and introducing the famous Tibetan grammatical works after explaining the process of creation of the Tibetan script by Thonmi sambhoṭa (7th century) as well as his grammatical works.

The problem whether the *Sum chu pa* and *Rtags 'jug* are Thon mi's authentic works is a debatable topic among the modern scholars, but in the traditional understanding, the four works: *Sum chu pa*, *Rtags 'jug*, *Gnas brgyad chen mo*, and *Smra sgo* are considered to be the first basic Tibetan grammatical works. It is to be noted that the *Gnas brgyad chen mo* and *Smra sgo* are the grammatical treatises related both to Sanskrit and Tibetan. This suggests that Tibetan grammar has been closely related to and influenced by Sanskrit grammar since the early time.

From the time of Dbus pa blo gsal in the 12th century to the time of Rnam gling paṅ chen in the 18th century, a lot of commentaries on the *Sum chu pa* and *Rtags 'jug* were written, although most of them were quite short and lacking in detailed discussions. One of the most important figure was Rnam gling paṅ chen who made a significant achievement in the development of commentary on the *Sum rtags* by discussing the usage of *la don* particles and others in detail, but his interpretation was criticized by Pra ti rin chen don grub (17–18th cent.) in many respects. Moreover, Si tu also criticized many former interpretations such as those of Rnam gling paṅ chen and Pra ti, and so on.

It is clear that Rnam gling paṅ chen's interpretation had a great influence on the formation of the grammatical tenets of Pra ti and Si tu. From the time of Pra ti and Si tu, the style of interpretation of classical Tibetan grammar has been divided into two groups: the Pra ti style and the Si tu style. Subsequent grammarians did not necessarily belong to either of the two styles. There also occurred fusion interpretations where the advantages of them was selected by later commentators. At any rate, the two styles have played an important role in Tibetan grammatical tenets since the 18th century.

Furthermore, in the latter half of the 20th century, when Tshe tan zhabs drung and Dmu dge bsam gtan appeared, the Tibetan grammarians aimed at reformation of the Tibetan language that was destroyed or damaged during the Cultural Revolution. At the same time, a reassessment of traditional Tibetan grammar has begun to be discussed by way of a new form of system that incorporates insights gained from the modern linguistics and the traditional interpretations of the verses of the *Sum Rtags*.